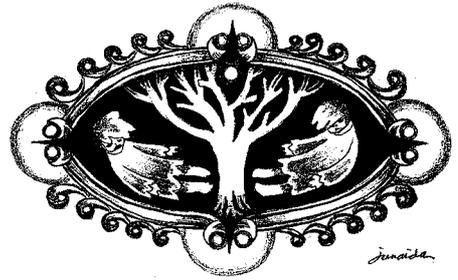


朝日 歌壇 俳壇



〈日曜日のプロローグ 41〉 junaida

◆長谷川 權選

真つ白な龍の背中や寒波来る
 (小山市) 松本 喜雄

なまめかしき肌を見せ合ふ大根かな
 (横浜市) 菅沼 葉二

新妻の叉手神がかり白魚波む
 (津市) 中山 道治

すずしろや空には宇宙ステーション
 (奈良市) 藤岡 道子

白梅や一人暮しの水の音
 (静岡県河津町) 岩城 紀子

寒の鯉水を鰯として沈む
 (今治市) 横田青天子

俳句てふ命の柱冬ももり
 (長崎市) 下道 信雄

寒鯉やわけても佐久の味噌仕立て
 (三浦市) 秦 孝浩

歳時記に見る虚子の世の寒さかな
 (長崎市) 徳永 桂子

凍蝶よキーウ市民も耐え忍ぶ
 (さいたま市) 反町 修

【評】一席。上空の寒波を想像しているのだ。「真つ白な……背中」がリアル。二席。店先に並ぶ麗しい大根たち。女湯のような。三席。叉手網をさばくうら若き妻。さながら神の巫女。十句目。ロシアの侵略に耐えるウクライナ。五度目の春。

◆大串 章選

切り株は樹木の墓標 荒鷲
 (大村市) 小谷 一夫

大寒や一汁一菜一人生く
 (広島市) 谷脇 篤

生きさまを告ぐる古老の初便り
 (鎌倉市) 江刺家 徹

椿落つ死者は生者の内に住む
 (久喜市) 加藤 建亜

雪たるま人語に耳をかたぶけて
 (輪島市) 國田 欽也

親撃たれ冬眠知らぬ子熊かな
 (横浜市) 白川 修

白骨となりし巨木や雪に立つ
 (四国中央市) 石川 明憲

寒月や師とも仰ぎし人の通夜
 (大阪市) 山内 蘭彦

夢で会ふ後姿や雪が降る
 (高松市) 島田 章平

難病の行き先見えず木の葉墜
 (玉野市) 北村 和枝

【評】第1句。「樹木の墓標」とは言い得て妙。年輪を見たら樹木の年齢も分かる。第2句。「一汁一菜」と「一人生く」が響き合い質素な暮らしを振る。第3句。生き様を告げるとは如何にも「古老の初便り」らしい。

◆高山れおな選

五月蠅為す神薄く冬の選挙戦
 (藤沢市) 朝広三猶子

着ぶくれて虚声とびかふ世上ゆめ
 (東京都練馬区) 吉竹 純

成人の日井戸覗くことスマホ見る
 (相模原市) 渡辺 一充

多羅の葉に冬蝶伏して梵字めく
 (東京都江戸川区) 中村 孝哲

春の雷神馬のまなこ透きとほり
 (三重県明和町) 奥井 佳子

人の世に底知れぬ声鬼やらひ
 (櫃原市) 佐藤 雅之

赤面の過去の投句と響替える
 (相馬市) 根岸 浩一

大寒や十一党の選挙戦
 (新宮市) 中西 洋

投票所不安は熊と雪女
 (岡山市) 風虎

夕方にほしがきとりこむお手つだい
 (越谷市) 宮津 亜紀

【評】朝広さん。「五月蠅為す」をネガティブ一辺倒に受取ると底の割れた時流批判にとどまる。それは一面ではエネルギーの発露でもある。吉竹さん。やはり選挙戦を詠むが上五で自分を落とすことで底割れを防ぐ。十席。作者は小学三年生。

◆小林 貴子選

真つ新な世を造らんと雪の降る
 (堺港市) 大谷 和三

うづたかく雪積みあげてバベルめく
 (苫小牧市) 齊藤まさし

じゃじゃ馬も野次馬も来月初句会
 (富里市) 西尾 至雲

元日におやこげんかでおおあわて
 (藤沢市) 佐藤 由佳

やり直し効くが現世福は内
 (松山市) 安野 宏治

どの党もちょっと違うの雪見酒
 (池田市) 橋本多嘉子

何事かささやきながら積る雪
 (広島市) 谷脇 篤

恵方巻たべてみたいと鬼の子が
 (京都市) 中井重士子

陣取りの遊びは遊び春寒し
 (松阪市) 籠谷ひろこ

丘に立つ裸木や十字架に見ゆ
 (埼玉県越生町) 浅野リベカ

【評】一句目、すべてを覆う雪で新しい世が来ればいいのに。二句目、それどころではない大雪の地域にお見舞い申し上げる。三句目、新年記念に人間の馬二種類が句会に。四句目の作者は小二。特別な日に頑張ると、裏目に出てしまうことも。

短歌時評 「短歌入門書」という信仰 山崎 聡子

短歌を書くことと想ったとき、入門書を読んでもよいという人は多いのだろう。「短歌ブーム」の反映か、書店には短歌入門書がいくつも並び、そのどれもが違った切り口から「短歌を書く」という行為を紐解こうとしている。そのいくつかを読んで思うのは、入門書を書くことは、歌人にとって、短歌に対する信仰の告白のような一面があるということだ。それが如実に表れているのが、服部真里子の近刊『あなたとわたしの短歌教室』だ。短歌入門書という、名歌とされる歌を引用しながら、創作のための技術的な指南が展開されるのが王道だ。そこには、各歌人がもつ「歌の善し悪し」についての価値判断があり、おのずとそこの歌人の短歌観が透び、一方、服部の本では「人間はみな、他の誰とも違っていない」と説き、誰もが無意識にも持っているあなたらしいおもしろさを引き出すための五つの課題が展開される。同時に、短歌は必ずしも感情などの内的要請に基づいて書かれなくてもよい、作中主体を作者と分けて考えるなど、創作の場の心理的安全性を保つための考え方が示される。これらは「感情が動く経験をするれば上手な短歌が作れる」という一般論に対する反論であり、服部の短歌に対する姿勢が色濃く感じられる。

二〇〇〇年代初頭、言葉で世界の価値を覆すことを短歌という爆弾で轟かせたのは穂村弘だったが、入門書はときに読者へのアシテーションを含みながら、創作の核心部分を曝け出す。どれを信じても、信じなくても、読者は手探りで自分なりの方策を探すしかないのだ。(歌人

「百人一首バトル」 5人の歌人(栗本京子、穂村弘、佐藤弓生、千葉聡、石川美南)がそれぞれのテーマに添って百首選んだアンソロジー。(書肆侃侃房・2810円)

梅崎実奈編「猶ほ硝子のフリルで踊る」 「幻想」をテーマに、詩歌の棚を担当してきた書店員が編んだアンソロジー。147首を取録。(河出書房新社・2530円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週刊2作品まで)。QRコードから

